



東京YMCA

2016 7/8月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 廣田光司
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

2016-18年中期計画がスタート

座談会

若い生命を豊かに育てるために



むらさぎ かつみ 村杉 克己さん

東京YMCA理事/会員部運営委員長



岡田 ナスカさん

東京YMCA職員(山手コミュニティセンター勤務)



菅谷 淳さん

東京YMCA副総主事
*委員会では事務局として委員にアドバイスした。

●菅谷 2012年14年度の中期計画は財政再建を目的とし、新しい事業を検討するといふよりも20年近く続いた赤字の解消に力点を置かざるを得ませんでした。しかしその結果として2013年に計画を上回って収支バランスが改善したため、今回の中期計画はより自由な発想で策定することができたと思っています。若手職員によるタスクチームが作成した答申書も参考にしながら、YMCAを客観的に見られる会員も加えて委員会を組織し、幹部職員は事務局として列席するにとどめて議論を重ねました。

●上田 たしかに東京YMCAはこれから、諸事業の再配置などを控

●菅谷 委員会で「YMCAは「会員の運動体である」という原点に立ち返って、会員と何かを時間をかけて議論しました。

●村杉 とはいえ会員にはさまざまな種類の活動があります。活動の担い手として行動する会員もいれば、会費を払うことで

●菅谷 事務局側では財務計画について腐心しました。今後、新しい拠点を開設したり、新規プログラム開発などとして

●菅谷 必要なのは、今後は実行委員会を設置し、これを移行に移していく予定です。

●菅谷 必要なのは、今後は実行委員会を設置し、これを移行に移していく予定です。

●菅谷 必要なのは、今後は実行委員会を設置し、これを移行に移していく予定です。

●菅谷 必要なのは、今後は実行委員会を設置し、これを移行に移していく予定です。

●菅谷 2012年14年度の中期計画は財政再建を目的とし、新しい事業を検討するといふよりも20年近く続いた赤字の解消に力点を置かざるを得ませんでした。しかしその結果として2013年に計画を上回って収支バランスが改善したため、今回の中期計画はより自由な発想で策定することができたと思っています。若手職員によるタスクチームが作成した答申書も参考にしながら、YMCAを客観的に見られる会員も加えて委員会を組織し、幹部職員は事務局として列席するにとどめて議論を重ねました。

●菅谷 委員会で「YMCAは「会員の運動体である」という原点に立ち返って、会員と何かを時間をかけて議論しました。

●菅谷 必要なのは、今後は実行委員会を設置し、これを移行に移していく予定です。

大きな転換期を迎えつつある東京YMCAは、次の10年どこに向かおうとするのか。7月、最初の3カ年計画として「第1期中期計画(2016-2018)」が策定され、今後具体的な実施に向けて動き始めることになりました。この計画は、評議員や委員および若手の職員10人による「中期計画策定委員会」が15回にわたって議論を重ね、策定しました。策定にかかわった方々に、その思いや経緯を聞きました。

(▶▶2面に計画概要を掲載)



しょうへい 上田 晶平さん

東京YMCA評議員



ひろた こうじ 廣田 光司さん

東京YMCA総主事/代表理事

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

赤三角

朝の連続ドラマを最近よく見えています。広岡浅子、村岡花子などYMCAと関係のある主人公に続き、今は「暮らしたの手帖」を創刊した人の物語です。▼番組中「暮らしをよくする」という言葉が耳に残りました。人がまらず生き抜くために、まさに必死に生活していた時代。その中で生きる希望を見出すにはどうしたらいいのかを問い、日々の当たり前の生活が、物質面だけではなく心のありようから豊かになるよう願って雑誌を編集していた。そんな物語が描かれている気がしますが、現在の日本は物質面では豊かになりましたが、心の中で必死に将来の不安と闘っている人々を見受けま

(まごめ・広報室)

(会員部運営委員)

山口直樹

〈要旨〉

2016-18年 東京 Y M C A 中期計画

= 1面より

1. はじめに

東京 Y M C Aはその使命に基づいて、「若い生命を豊かに育てる」市民社会を創出し、次の10年を見据え、そのための第一期中期計画（2016年～2018年）を策定する。

2. 東京 Y M C Aの将来展望

- 1) 東京 Y M C Aは、その使命と目的を踏まえ、青少年等の心身の健全な成長を図るとともに奉仕の精神を養い、もって民主的社会の発展と世界の平和に寄与する活動を展開する。
- 2) 東京 Y M C Aが事業やプログラムを通じて子どもや青少年に伝えていきたい重要な価値は「思いやり」、「誠実さ」、「尊敬心」、「責任感」の4つとする。
- 3) 東京 Y M C Aは、会員による運動体であり、その伝統を守る。
- 4) 東京 Y M C Aは、近い将来本館を、都内中心部に配置することを目指す。また東京全域を俯瞰した複数の適切な活動拠点を配置する。
- 5) 東京 Y M C Aは、健全な財政を維持する。

3. 基本方針

- 1) 社会、青少年を取り巻く変化を見据えた新事業の展開
社会や青少年の置かれている環境の変化と使命、目的に照らし合わせ、東京 Y M C Aが担うべき新たな新事業の開発を目指す。
- 2) 会員活動の活発化
東京 Y M C Aは、会員による運動体であり、会員の多様な関わりが東京 Y M C Aの活動を支える。
- 3) 東陽町会館からの移転とそれに伴う事業再編成
東陽町会館からの移転に伴い、社会体育・保育専門学校校舎の効率的活用をはかる。
- 4) 事業の展開およびコミュニティーセンターの充実と拠点配置
コミュニティーセンターは、その機能を整備し、会員、学生、生徒、参加者、保護者、地域の人々など多様な人々がよく集まる場となるようにハード・ソフト両面より一層の充実を図り地域への貢献度を高める。
- 5) スタッフの育成
子どもや青少年の成長を共に考え担うよき人材に、東京 Y M C Aへの参画を求め、人材の育成に積極的に取り組む。
- 6) 財政の健全化
公益法人の基盤である寄付・募金の働きかけを強化するとともに、各事業、コミュニティーセンターは、年度毎に安定的に収支を整え、持続的な事業活動が可能な財務体質を築く。
- 7) 東京 Y M C Aグループ法人との協力
当計画は「学校法人東京 Y M C A学院（以下学校法人という）」および「Y M サービス株式会社（以下株式会社という）」と全面的に協力して遂行する。

4. 会員活動計画

- 1) 会員の現状と課題
Y M C Aは会員による運動体として始まったが事業規模の拡大とともに専門性と安定性が求められ、保育士や教員など多くの専門職スタッフが必要とされるようになり、会員という賛同者や協力者、担い手を広げていく運動体としての側面が薄れてきた。
- 2) 会員とその活動のありかた
目指すべき会員の姿は、やりがいや誇りを持って活動を担う会員、Y M C Aの使命と働きに賛同し支える意義を自覚する会員である。そして、会員の増強が Y M C A全体の働きを活性化させ、さらに共感や賛同の輪を広げる好循環を生み出していく。
- 3) 会員による運動体としての活性化の方策
会員が Y M C Aの働きに関わる機会を広げ、関わる仕組みを整え、関わる意義をより深く認識でき、共感や賛同の輪がさらに広がる方策を提案する。
 - ①「会員による運動体」であることを明確にする
会員が Y M C A全体の運営に関わる機会を増やす。評議員の選出に会員が関われるような仕組みをつくる。また、コミュニティーセンターの運営に助言する委員会を設置し、地域の社会課題に取組む活動を会員によって進める仕組みをつくる。
 - ②新たな会費の仕組みづくり
会費については、年齢に応じた会費額の設定を検討する。
 - ③会費の使途の再検討と明確化
会費が具体的に「誰のために、何のために使われるのか」を明確にし、会費の納入が「Y M C A運動への参画」と感じてもらえるように工夫する。
 - ④会員活動の企画・開発・運営サポート・紹介システム構築
コミュニティーセンターの活動を横断的に紹介するシステムを立ち上げ、ボランティア養成講座を開催し「ボランティアをするならまず Y M C Aに行こう」という考えが広く世間に広まるように工夫する。
 - ⑤会員情報の把握と管理システム構築
既存の会員、新規会員、会員候補者などのデータを万全なセキュリティーの下

で、その会員の資格、経験、技量、特技などの情報を登録できるシステムを構築する。

- ⑥ユースリーダーのつながりを維持
ユースリーダーとして活躍した学生とのつながりを維持するために、Y M C Aからの定期的な発信をフェイスブック等の SNS を用いて行う。
- ⑦会員大会を魅力あるものにする
- ⑧プロジェクト小委員会の設置

5. 寄付・募金活動計画

毎年定期的に行う年間募金活動と3～5年に一回行う大規模募金活動とに分けてそれぞれを計画的に展開する。
経済的に困難な状況にある子ども・青年を支援するフレンドシップファンドの利用者の声や利用実績を募金ツールや機関紙を通じて今以上にアピールし、ファンドのさらなる周知をはかる。
その他、遺贈制度の継続的な広報、寄付・募金の成果の可視化、寄付・募金活動ボランティア設置、寄付・募金の仕組みの工夫、「将来の夢」への寄付の仕組み作り、税制上の優遇措置の案内、企業訪問による CSR（企業の社会貢献活動）のニーズ調査とプログラム提案などを行う。

6. 事業の具体的展開策

- 1) 事業領域
東京 Y M C Aの事業の目的と領域を定め、多岐にわたって展開されている個別事業を整備する。
- 2) 5つの領域と個別事業展開策
 - ①子ども（幼児から青少年）の全人的成長に関わりつつ、子どもの命を守るチャイルドケア領域
 - ②青少年の全人教育を支援する野外教育領域
 - ③さまざまな教育の機会を提供する学校領域
 - ④国際的人材育成領域
 - ⑤コミュニティーセンター領域

7. 新規事業の開発

青少年が置かれている環境変化を見据え、東京 Y M C Aが取り組むべき先端的な新規事業を開発する。
各事業の現場で生み出される新しいアイデアを具体化する仕組みを作り、それを企画開発するために専任部署を設置する。
企画開発室が中心となって大学、NPO・NGO、ボランティア団体、企業などと情報を共有し協働して新規事業を開発する。

8. 財務計画

各事業ごとに収支バランスを整え不要な支出、無駄な費用の削減、電気代等のエネルギー費の節約など費用の効率化に取り組む。また資金の内部留保に努め運用は財産運用規定に従って安全で確実な方法で行う。

9. 組織計画

コミュニティーセンターの会員活動を主体的に担い、コミュニティーセンター全体をサポートする組織を強化する。また各部に「会員活動担当者（仮称）」を配置し、会員部と連携して会員活動、地域活動を推進する。

10. 拠点計画

人口動向、地域課題、想定される対象者の居住エリアなど多角的な視点から新しいコミュニティーセンターを設置する。
すべての拠点は収支バランスがとれることを前提にする。特にコミュニティーセンターは、基幹となる事業との組み合わせ、会費の配賦、人件費の一部を本部や同一施設内の事業が担うなどの工夫を検討する。

11. 要員計画

人材の登用は、若手を含め、能力と意欲のみなざる人材を起用する。

12. 人材育成計画

キリスト者の育成、内部研修、外部研修コース等への派遣を強化する。
大規模災害発生時に避難所の運営やボランティアのコーディネーターなど、迅速かつ適切に対応できる人材を育成する。

13. 設備投資計画

- 1) 耐震工事を含めた山手会館の改修計画作成に早急に着手する。
- 2) 今後10年間の設備投資計画は、自己資金の範囲で順次実施する。

以上

〈中期計画策定委員会〉

村杉克己（理事/会員部運営委員長）	戸坂昇子（職員：本部事務局）
宮内友弥（評議員）	山梨雄一（職員：南センター）
上田晶平（評議員）	岡田ナスカ（職員：山手センター）
小口多津子（会員部運営委員）	〈事務局スタッフ〉
廣田光司（東京 Y M C A 総主事）	菅谷 淳（副総主事）
小野 実（職員：にほんご学院校長）	山添 仰（総務部）
小畑貴裕（職員：人事部/国際ホテル 専門学校前校長）	星野太郎（財務部）

障がいのある子どもたちへ

「放課後等デイサービス」を開設

西東京コミュニティセンターは今年、「放課後等デイサービス東京Y M C Aさくら国立(以下「さくら国立」)を新しく開始しました。

放課後等デイサービスは、2012年4月に児童福祉法に位置づけられた新たな支援です。障がいのある小中高生が放課後や学校の長期休業中に、安心して居場所を過ごし、必要な療育プログラムも受けられるサービスで、障がいのある子どもを抱える家庭支援も目的としています。

費用の9割を自治体が負担するため、1割負担で利用できますが、利用には、事前に市区町村が発行する「受給者証」が必要になります。これは、療養手帳のように障がい名や程度を証明するものではなく、障がいの認定がされていない児童も福祉や医療サービスの必要が認められれば取得できます。

東京Y M C Aは、20年にわたり発達障がいのある子どもたちにソーシャルスキルやライフスキルトレーニング(ASCAクラス)を行ってきました。そこで培った経験を、豊かで納得のいく人

「さくら国立」に役立てることで、より多くの子どもたちに、利用しやすい費用でトレーニングを提供することができま

また、野外教育や創作活動などY M C Aらしい活動も取り入れて、すべての子どもたちがいきいきと生活し、生涯の成長を見据えた支援の中

また西東京コミュニティセンターが、平日もワイズメンやリーダー等大人だけでなく、多くの子どもたちが集う、賑やかなセンターになっていければと願っております。(西東京コミュニティセンター 中里敦)

賛助会年会・アドバイザー会

熊本地震支援活動も報告

日ごろ東京Y M C Aを支えてくださる企業・団体には、感謝や表彰を行なうため7月14日、恒例の「賛助会年会・アドバイザー会」を開催。会場となった千代田区の学芸会館には、賛助企業23社と、アドバイザー、評議員など50人が来場されました。賛助会は、年会費による支援のほか、チャリティランやバザーなどイベントのサポート、

災害復興支援募金等への協力など、さまざまな形で東京Y M C Aを支えてくださっています。

この日は、勝田正佳評議員会長の開会挨拶に続き、氏家純一賛助会

長(野村ホールディングス株式会社名誉顧問)から、会員への感謝が述べられ、また、賛助会員となつて20年、45年など節目の年にある会員企業に、感謝状を贈呈しました。(左欄参照)

その後、「熊本地震」被災地の実際と今私たちが出来ること」と題して、4月に現地で支援活動をした東京Y M C A職員佐久間真さんが講演。佐久間さんは神戸Y M C Aの職員だった時に阪神大震災に遭い、1年半にわたって避難所運営を担ったほか、東日本大震災でも支援活動の経験があり、今回もいち早く現地に赴き、避難所の体制を整えました。

講演では、被災地の状況と共にY M C Aらしい手厚い支援活動の様子が報告され、会場からは応援のメッセージや募金が寄せられました。

多くの協力がよって多彩な活動が展開できたことを感謝し、閉会となりました。

2016年度 表彰賛助会員

- 継続45年 株式会社ホテルオークラ東京
三菱商事株式会社
株式会社ニュー・オータニ
- 継続40年 廣瀬ビルディング株式会社
- 継続35年 水戸工業株式会社
- 継続25年 フットマーク株式会社
富士ゼロックス株式会社
- 継続20年 学校法人桜美林学園
森トラスト・ホテルズ&リゾーツ株式会社
- 継続10年 デュプロ株式会社
- 継続5年 上田八木短資株式会社
株式会社レクトン
- 新入会員 一般財団法人日本スタディ・アプロード・ファンデーション
株式会社リクラブ
株式会社宿屋塾
株式会社アークコミュニケーションズ
パトンプログラフ株式会社

感謝

■ 伝統のヨット「オメガ」修理完了



野尻キャンプの「オメガ」は、約90年前に造られたヨットで、復元などを経ながら毎夏多くのキャンパーを魅了してきました。現在野尻湖に2隻しかない文化的にも価値の高いものですが、数年前から老朽化が気になり始めていたところ、「東洋英和女学院父の会」が専門家をご紹介くださり2年前から補修が進められてきました。

東洋英和女学院は、野尻キャンプ場の隣にキャンプ場をもつため永年にわたる交流があり、支援をお申し出くださいました。

改修費用は「野尻学荘クラブ」はじめ「東洋英和女学院父の会」、「東京むかでワイズメンズクラブ有志」などオメガに思い入れのある方々が寄付くださいました。多くの方のご厚志によって立派になったオメガは、今夏もたくさんのキャンパーを乗せて大活躍しています。心より感謝申し上げます。(野外教育センター 諏訪治邦)

改修費用は「野尻学荘クラブ」はじめ「東洋英和女学院父の会」、「東京むかでワイズメンズクラブ有志」などオメガに思い入れのある方々が寄付くださいました。多くの方のご厚志によって立派になったオメガは、今夏もたくさんのキャンパーを乗せて大活躍しています。心より感謝申し上げます。(野外教育センター 諏訪治邦)

■ 第19回「会員芸術祭」力作集まる



Y M C Aの会員・関係者が絵画や陶芸、写真などを披露する「会員芸術祭」が6月27日～7月2日、東陽町センターで開催されました。25日のオープニングセレモニーでは、菅谷功氏(新槐樹社準委員)による講評のほか、嶋倉昌平氏が津軽三味線を熱演。三味線の伴奏に合わせて、来場者が歌と踊りを楽しむ場面もありました。

今年団体含む51人が78点の作品を出展。来場者は、プロ並みの腕前に感嘆したり、学生の率直な表現にほほ笑んだりと楽しみました。なお、今年もまた芸術祭実行委員会が運営全般を担い、在京ワイズメンズクラブとにほんご学院の学生たちが受付に協力くださいました。感謝して報告します。

(会員部 小松康広)

子育てコラム



親の背中子どもも育つ

ここ最近、街中で赤ちゃんを「おんぶ」している姿を目にするのが少なくなってきたり、前抱っこが主流なのではないか。保育園の中でも、「おんぶ」をする先生が減ってきているように感じます。

先日、保育者対象の研修会である牧師が、子どもには3回、親(大人)の背中を見せ

ることが必要であると、「親(大人)と子どもとの関係」を主題に心に残るお話をされました。

その3回とは、①受容の背

中(おんぶを通して、背中のぬくもりから感じるあたたかい受け入れ/乳幼児期)、②拒否の背中(わがままな時、あなたは世界の中心ではない、多くの一人であることを教える/児童期)、③模範の背中(自分はどうな風に生きていくのか、真実を求めて前向きに生きる姿勢を教える/青年期)

「親の背を見て子は育つ」ということわざもありますが、一般的におんぶのメリッ

トとして、赤ちゃんは大人と同じ視線の景色を見ることにより視野が広がり好奇心が増したり、自らの両腕で大人の

背中しがみついたり、自らの力で腰を伸ばして立ちあがろうとする姿勢を取ることで、姿勢や情緒、運動神経を良くするとも言われています。

牧師から、子どもが最初に見る背中が、ぬくもりを感じる「おんぶ」であるとメッセージをいただきました。「おんぶ」ひとつで、子どもは愛されている、受け入れられていると感じるのです。泣いている子どもをおんぶするとピタッと泣きやむのも納得がいきます。大好きな大人の背中に安心するのでしょうか。早速、愛おしい子どもを「おんぶ」してみませんか。

齋藤 希世
(東京Y M C A社会体育・保育専門学校 教務部長)

神戸女学院大学名誉教授の内田樹さんは『街場の共同体論』の中で次のように指摘しています。

「道路に落ちている空き缶を拾うのは、誰にとっても『自分の仕事』ではありません。自分が捨てたわけじゃないんですから。そんなものは捨てたやつが拾うべきであって、通りすがりの人間にそんな責任はない。それも理屈です。そういうのは『みんなの仕事』であつても『自分の仕事』ではない、そう考

えるのが『子ども』です。『おとな』というのは、そういう時にサ

すべての人を一つにしてください

「私がやっておきます」

ども」の数が異常に増殖してしまつた社会です。誰もが「おい、な」とかしろよ」と怒鳴るだけで、『はいはい、私がやっておきます』という人はさっさと出てこなさい。

「みんなの仕事」を「自分の仕事」として

た。親からも「早くすしなさい、人より先へ」と教えられてきました。市民社会では、競争から共生への意識転換が求められています。

「みんなの仕事」を「自分の仕事」として

「みんなの仕事」を「自分の仕事」として

(総主事 廣田光司)